

生きて帰ってきた男  
—ある日本兵の戦争と戦後

小熊 英二  
岩波書店、2015年



写真は amazon

本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に10冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうしたAクラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

ここ2ヶ月ほどで読んだ新刊本の中では、小川隆(2015)「禅思想史講義」と小熊英二(2015)「生きて帰ってきた男」が面白かった。前者はかなりマニアックな内容なので、後者を紹介することにします。

「生きて帰ってきた男」は、著者・小熊英二氏（慶応義塾大学教授）が実父である小熊謙二氏（1925-）の生涯をオーラルヒストリーの手法で描いたものです。第14回小林秀雄賞受賞作品。目次構成は、次のとおりです。

- 第1章 入営まで
- 第2章 収容所へ
- 第3章 シベリア
- 第4章 民主運動
- 第5章 流転生活
- 第6章 結核療養所
- 第7章 高度成長
- 第8章 戦争の記憶
- 第9章 戦後補償裁判

小熊謙二氏は、1925年北海道佐呂間村（当時）生まれ。母親が結核に罹ったこともあって、1932年に東京にある祖父母の家に引き取られ、ここで成長し、早稲田実業を卒業した

後、1934年に富士通信機製造に就職します。

1944年11月、陸軍に召集され、満州に派遣されますが、戦後ソ連の捕虜となり、シベリア・チタの収容所に収監されます。極寒の地での3年間に及ぶ収容所生活を生き抜き、1948年8月に帰国。

しかし、富士通信機製造への復職がかなわなかったため、大企業正社員への道は閉ざされ、これ以降、井戸掘り作業員、ハム製造会社の経理担当、証券会社の事務員、製版会社の営業担当と様々な職業を転々とする生活が続きます。

1951年に肺結核が見つかり、この年から1956年までの約5年間を新潟県にあった国立内野診療所で生活保護を受けつつ暮らしますが、胸郭形成の外科手術を受け、片肺に近い状態になったため、これ以降、身体に負担となるような仕事は出来なくなります。

1958年、株式会社立川ストアという新興会社に就職し、スポーツ用品の外商（教育機関や企業・工場）を担当。経済成長とともに人々がスポーツに親しむようになったこともあって、この部門は順調に発展し、謙二氏の生活水準も向上していきます。水道もガスもない三畳一間の貸家で妹と一緒に暮らすような生活から、1959年には四畳半と六畳に台所とトイレがついた都営住宅での生活に代わり、新聞をとる余裕もできます。謙二氏は、「下の下」から「下の中」になったと言います。1961年に寛子氏と結婚。

1965年、立川ストアは倒産しますが、これを機に、謙二氏は立川ストアの優良部門であるスポーツ部門を引き継ぐ形で立川スポーツ株式会社を設立し、独立。事業は順当に発展し、1969年には4LDK鉄筋2階建ての家を新築するまでになりますが、1972年に長男の剛一氏が急逝。立川スポーツも規模は拡大しているものの、一時の勢いはなくなり、停滞と安定の時期に入ります。1978年には八王子の新興住宅地に転居。6LDKの木造住宅が終の棲家になります。

1985年に60歳になったのを機に次第に会社経営から距離を置くようになり、その分、「多摩丘陵の自然を守る会」などのコミュニティ活動に参加するようになります。また、1996年には、戦後補償裁判に元朝鮮人日本兵と共同原告になります。

本書において、謙二氏と英二氏の関係は、親子ではなく、研究対象と研究者として構成されているため、記述に感情が混じることは少なく、客観的で淡々としています。しかし、それが記述を冷たくすることはなく、むしろ記述の真迫性を増しているように思われます。こうした部分を幾つか抜き出してみましよう。

「自分が戦争を支持したという自覚もないし、反対したという自覚もない。なんとなく流されていた。大戦果が上がっているというわりには、だんだん形勢が悪くなっているので、何かおかしいとは思った。しかしそれ以上に深く考えるという習慣もなかったし、そのための材料もなかった。俺たち一般人は、みんなそんなものだったと思う。」(pp.56)

陸軍への入営通知が来て、その 5 日後には入営するのですが、その間の様子について。

「謙二の周辺では、そうそうした習慣はすたれていた（筆者注：日の丸への寄せ書きのことだが、出征者が余りにも多いのでやらなくなった）。富士通信機でも、とくに壮行会といったものはなかった。『たった五日だった。日常が流れるように過ぎていった』と謙二は回想している。」（pp.58）

「零下 40 度のシベリアの冬で、服が着られなくなったら命取りだ。糸がなくなったあとは、はけなくなった軍用靴下をほぐして作った」「とくに縫い針は、収容所では貴重品だった。1946 年夏以降になると、器用な捕虜には火打ち石を自作した人もいたし、針金を手に入れて自作しようとした人もいた。しかし、針金を伸ばして尖らせるのはできても、糸を通す穴を開けるのはむずかしい。自分は針があったから、とにかく助かった」（pp.118-119）

シベリア抑留から帰国した謙二は、当時父親が住んでいた新潟にいきます。そのときの様子です。

「涙の出迎えといった劇的なものはなにもなかった。……父の自宅について夕食がでた。『出てきたのは、ごく普通の夕食だった。これにも失望した。田舎だからごちそうが出るとは思わなかったが、出てきたのは、何の工夫もない食事だった。夢にまでみた帰国がこんなものかと思った』。……」（pp.174）

戦後 3、4 年の頃を回顧して、「……政治に関心がなかったわけではないが、とにかく余裕がなかった。内閣がどう交代しようと、まったく上のほうの話で、自分の生活には関係ないと思っていた」（pp.204）

「社会主義だの共産主義だのには、まったく夢を抱いていなかった。自分はソ連にいて、共産主義社会の現実を見ていたからだ。ソ連よりもアメリカのほうがよいと思っていた」

「しかし、戦前日本の軍国主義はもっとまっぴらだった。戦争の責任も考えない保守勢力は論外と思っていた……」（pp.205）

個人的には、次の 2 点が記憶に残りました。

第 1 は、シベリア抑留者約 64 万人の死亡率は 10%程度とされますが、その中で謙二氏は生き残った理由について次のように言います。

「自分が生き残れたのには、二つの理由がある。一つは、混成部隊に入れられて、収容所での階級差別がなかったこと（筆者注：収容所では階級が下の者ほど死亡しやすいので、捕虜になる前の部隊組織のまま収容されていたら、一兵卒に過ぎない自分は死んでいたかもしれないという意味）、もう一つは、収容所の体制改善が早かったことだ。自分がいた収容所は、方面軍司令部があったチタの街中にあつたから、改善が及ぶのが早かったと思う。はずれた地方にあつた収容所は、もっと死者が多かつたはずだ。」（pp.132）

第2は、現在においても続く問題です。

日本の福祉行政は申請主義ですが、申請するには制度の存在を知る必要があります。しかし、著者は次のように言います。

「公的機関にネットワークを持たない貧困者は、生活にも時間にも余裕がなく、制度があっても情報を得られないことが多い。」(pp.219)

著者は、この文脈で、療養所の入所者に公務員や教員が多かったのは、これらの人々が生活保護制度が改正されて支給しやすくなったという情報にアクセスしやすく、その結果、療養所に入居しても、生活保護で暮らせたからではないか、また、謙二氏が都営住宅に入居できたのは、外商回りで大学や学校といった公的機関との接触があったので都営住宅の募集情報をキャッチできたからではないか、ということを描きます。

本書は、著者があとがきで述べているとおり、戦前・戦中・戦後を通じた一人の「普通の人」の軌跡であると同時に、法制史や経済史などを織り込んだ、いわば「生きられた20世紀の歴史」です。主人公は、政治史や事件史に出てくるような「大人物」ではなく、市井に生きる「普通の人」です。こうした人々が自分の経験を書き残すことはめったにありませんが、だからといって、彼ら、彼女らが語るに値する経験や知見を持たないわけではありません。小熊謙二氏からこれだけの話を引き出した英二氏の力量には敬服しますが、なんといってもその根本は謙二氏にそれだけ豊かな経験と知見が備わっていたことにあります。謙二氏においても、英二氏という特別な息子を持たなかったら、その経験や知見は、このような形で人々に知られることもなく、ひっそりと埋もれ、忘れ去られてしまったことでしょう。

私たちは日々、実に多くの宝物をみすみす失ってしまっている。それにも関わらず、その事実にはほとんど気づいていない、ということに気づくのです。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本 武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）